

大正十一年五月十二日印刷
大正十一年五月十五日發行

生より生へ
定價貳圓參十錢

版權所有



著作者 松村信一

發行者 福永一良
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 村岡平吉
神戶市本町五丁目八十七番地

版元

東京市京橋區尾張町貳丁目拾五番地
福永書店

振替東京四〇四六六番
電話銀座壹六九九番

徳富健次郎著

新

春

龍舌蘭は六十年で花が咲く。著者は人生五十にしてやつと「新春」に到達した。それ程彼が負荷は重く、束縛は強く、苦闘は長かつた。彼が「新春」の歡喜の深大なる所以である。

「過去」の抑壓に苦しめられ進出の路を容易に看出し得ぬもどかしさに焦躁し或は自棄する青年男女に向つて、老少の下壓上壓の中間にはさまれて苦しき冷笑若くは妥協に通る、中年男女に向つて、若い生命の上壓を苦しむ妬む老年男女に向つて、「新春」は胸を開いて語る。彼は已に六萬壹千人に語つた。彼は更に一人もヨリ多くの人に語りたい。

何故ならば、「我は復活也、生命也、我を信する者は死ぬることも生くべし」と著者の身を假つて宣するは即ち自然の聲で、自然は一切を愛するからである。

三六判四百六十頁
緑金装羽二重表紙
寫眞五葉スケッチ一葉
定價金二圓三十錢
送料金十五錢

徳富健次郎 著

小説

黒い眼と茶色の目

四六判五百十二頁
黒洋布製箱入
定価金二圓四
送料金十七錢

「黒い眼と茶色の目」が第二十七版から「新春」と共に福永書店から發行する事になつたのは、形に影が引添うたやうなものだ。新春が形で「黒眼茶目」が影なのである。形は勿論讀んでもらひたい。影もまた見て欲しい。

大正九年十一月

著者記

徳富健次郎 著

みみずのたばこと

三六判洋布裝天金箱入
挿畫寫眞版九葉
定価金二圓五十錢
送料金十七錢

□□百〇一版序文を添ふ□□

百〇一版から「新春」と同じく福永書店で發行する「みみずのたばこと」は私が土の生活の第一所産で私には煩惱子だ。「みみずのたばこと」あつて初めて「新春」がある。土の上に生活して生あり、死あり、而して復生ある生命の連鎖に人が繋がる限り「みみずのたばこと」は讀まるべきものだ。

大正九年十一月

著者記

沖野岩三郎著

◆煉瓦の雨 □三版

富本憲吉裝幀
四六判布表紙箱入
定價金一圓六十錢
送料——十錢

沖野岩三郎著

◆宿命 □六版

富本憲吉裝幀
伊上凡骨彫刻
定價金二圓八十錢
送料——十四錢

厨川白村著

◆象牙の塔を出て □四十二版

四六判羽二重表紙特製
三色版一葉寫眞版三葉
定價金二圓八十錢
送料——十錢

賀川豊彦著

◆地殻を破つて □六版

純佛蘭西式裝幀
著者筆挿畫二葉
定價金二圓五十錢
送料——十錢

賀川豊彦著

◆主觀經濟の原理 □再版

菊判全一冊
背皮天金箱入
定價金五圓
送料——十八錢

賀川豊彦著

◆涙の二等分 □四版

三六判羽二重表紙
著者筆挿畫二葉
定價金二圓
送料——十錢

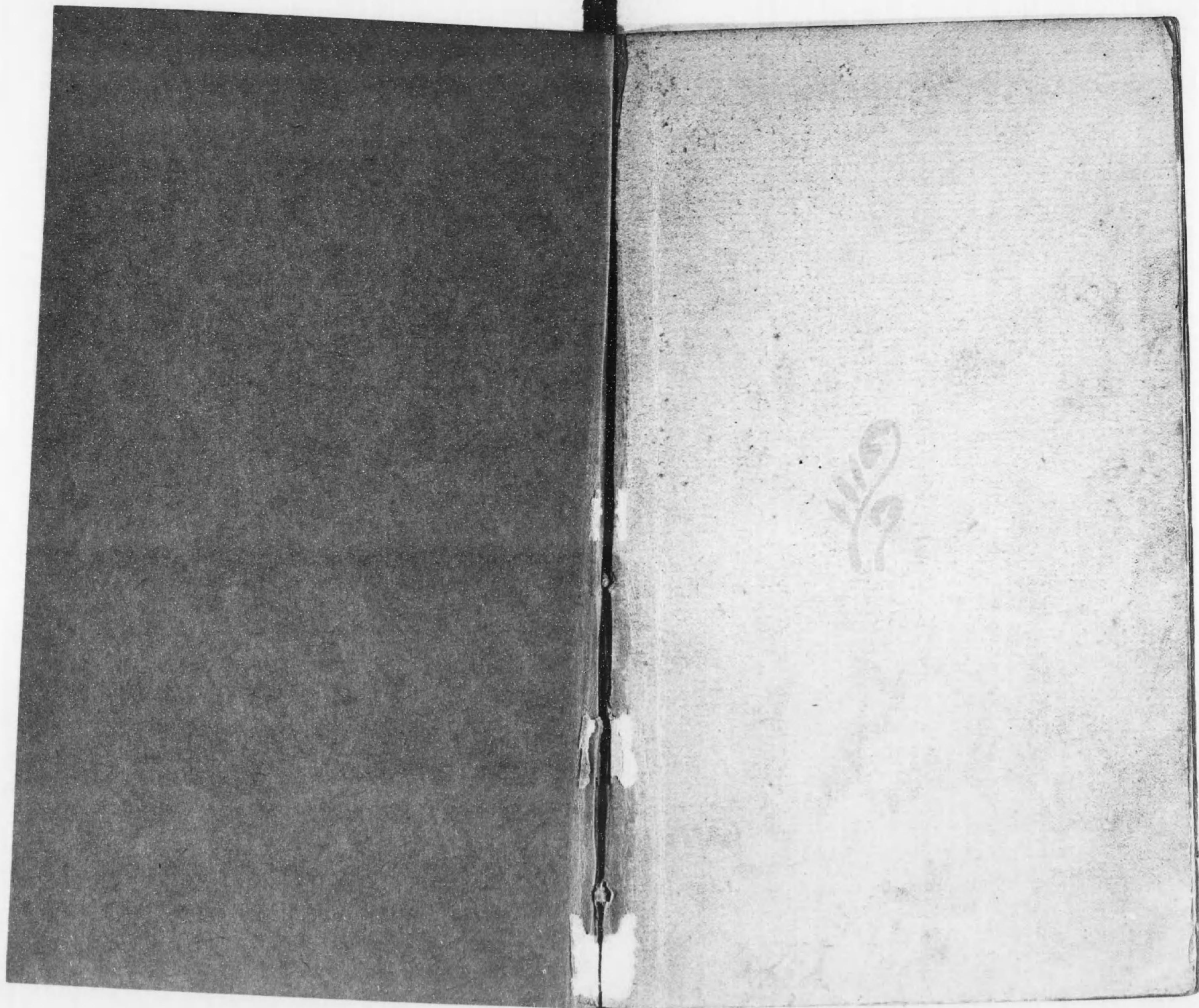
社會問題叢書

賀川豐彦編輯

三五判赤表紙五號總振假名

- | | | |
|--------|--------------------|-------|
| 久留弘三著 | (1) 勞働運動 | 定價四十錢 |
| 野坂鐵著 | (2) 英國社會運動史上の人々 | 定價四十錢 |
| 賀川豐彦著 | (3) 勞働者崇拜論 | 發賣禁止 |
| 宮崎力藏著 | (4) 經濟上より見たる修道院の研究 | 定價六十錢 |
| 内山俊雄著 | (5) 中世獨逸奴隸史 | 定價四十錢 |
| 宮崎力藏譯 | (6) 西洋經濟史論 | 定價七十錢 |
| 賀川はる子著 | (7) 貧民窟物語 | 定價六十錢 |
| 植田好太郎著 | (8) 佛國CGTの運動と哲學 | 定價五十錢 |
| 吉田源次郎譯 | (9) 佛國勞働階級史 | 定價七十錢 |

本の價は安いでせう。併しこの叢書は割引なしの眞理を勞働者諸君や、平民諸君に知つて戴く爲に出版するものであります……編者



506
109

終